

腹膜透析看護コース開設後の現状と課題

キーワード：腹膜透析 研修

○小野真美 倉成美貴子 上田泰枝 不動寺美紀（透析室） 町田裕美（5北）

I. はじめに

A病院腎センターでは腹膜透析（以下PD）患者への24時間オンコール体制をとっている。PD患者の緊急受診・入院は長年腎臓内科病棟が対応してきたが、昨年の病院改築を機に救急外来で初期対応を行う体制となった。また、PD患者が腎臓内科病棟以外に入院するケースが増えているが、PD看護の経験のない部署では対応できず、透析室オンコールNsや、PD外来の看護師が入院病棟へ出張し対応している現状がある。A病院看護部では救急看護・血液透析看護をはじめとし、がん看護・感染管理・スキンケア看護コースをH21年から開設している。そこで、PDは患者が実施する在宅治療法であるため、どの入院病棟でもPD看護が提供できる看護師を育成したいと考えPD看護コースを立ち上げた。

II. 研究の目的

院内でPD看護技術を習得した看護師を育成し各部署でのPD看護実践に活かすことを目的にPD看護コースを企画・実施した。その効果と課題を明らかにする。

III. 研究方法

1. 研究期間

H24年12月～H25年8月

2. データ収集方法

コース受講者に対する質問用紙調査を、実施直後とその半年後の2回行った。

3. データの分析方法

単純集計と自由記載からのカテゴリ抽出

4. 研究対象

看護実践ラダーⅡ以上でPD看護コースの受講が終了した看護師7名

5. 倫理的配慮

対象者から研究の承諾を得ており、個人が特定されないよう配慮した。

IV. 実施

研修の目標は、1. 腹膜透析看護の理解を深める 2. 演習・見学実習を通して腹膜透析の看護技術を学ぶ 3. 自部署における腹膜透析患者への看護ができるとした。

PD看護コースのカリキュラムは全4回のコースで、3回の集合教育と4回目で半日の実践研修となっている。（表1）集合教育では、1回目が腹膜透析の基礎、2回目が腹膜透析の看護とバック交換の講義後、デモ機を使つての演習、3回目が合併症についてと出口部ケアの講義後、デモ機を使つての演習を行った。4回目の実践研修では、PD外来の診察時に出口部ケアの実施、腎臓内科病棟で入院中の患者のバック交換を行った。研修期間中に入院患者がいない場合はデモ機を使用しての練習とした。

表1 PD看護コースカリキュラム

	研修内容
1回目 講義	1.腎臓の働きと腎代替療法 2.腹膜の構造と機能 3.腹膜透析の原理、治療の効果
2回目 講義・演習	1.腹膜透析各期の看護 2.外来での支援 3.バック交換演習
3回目 講義・演習	1.合併症 2.出口部ケア演習
4回目 院内留学	1.出口部ケア見学 2.チューブ交換見学 3.バック交換見学 4.PD外来の役割 5.入院中の看護

V. 結果

受講した7名全員が看護コースのカリキュラム全てを終了した。受講者7名の内、3名はPD看護の経験のある看護師で、4名は未経験の看護師だった。

<受講直後>

アンケートの回収率は85%。受講直後のアンケート結果では、「講義やビデオを見たあとの演習だったので理由が深まった」、「少ない回数で基本的なところが学べた」という反応があり、コースを受講しての達成度は10点満点で平均7.8点だった。

集合教育の講義については、「写真などもあり分かりやすい資料だった」「丁寧な説明だった」などという回答が多かった。

演習については、「デモ機を実際を使用したことでイメージが付き理解が深まった」との回答が多かった。

PD看護コースについての意見では、「患者さんへの実技の実施がしなかった」や、「実際に患者へ実施できるか不安」という回答が多かった。

看護コースで最も学びになったことでは、「基礎や実技、看護まで一通り学べたことがよかった」と回答があった。

自部署でどのように活かしていくかについては、「患者への看護」「スタッフへ伝達」と回答があった。(図1)

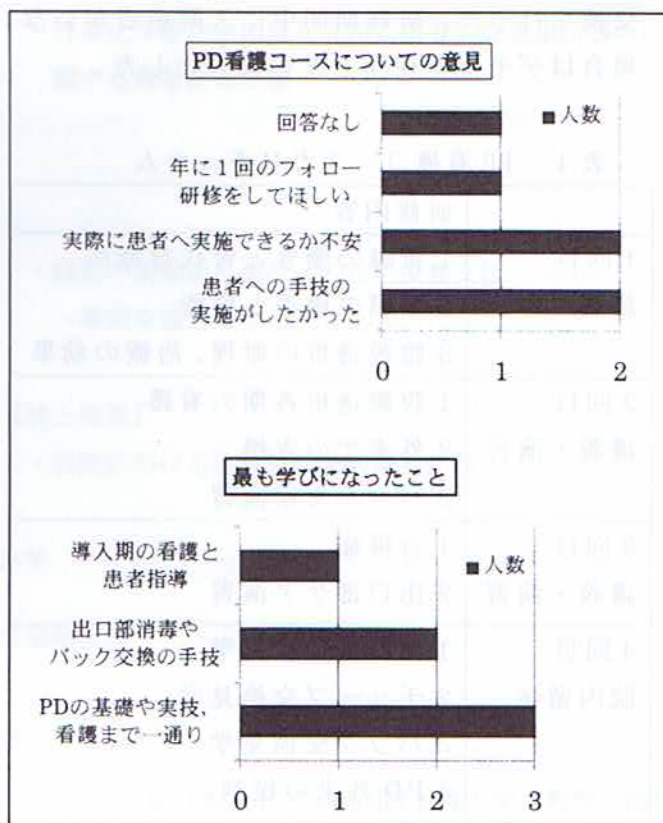


図1 受講直後のアンケート結果

<受講半年後>

半年後のアンケート結果からは、腎臓内科病棟以外の入院が少なかったため、自部署でPD看護を経験する機会が少なかったため、時間が経つと忘れてしまっていることが多かったことが分かった。また、PD看護コースを受講した看護師がほかのスタッフへ伝達する機会は全くなかったという結果だった。(図2)

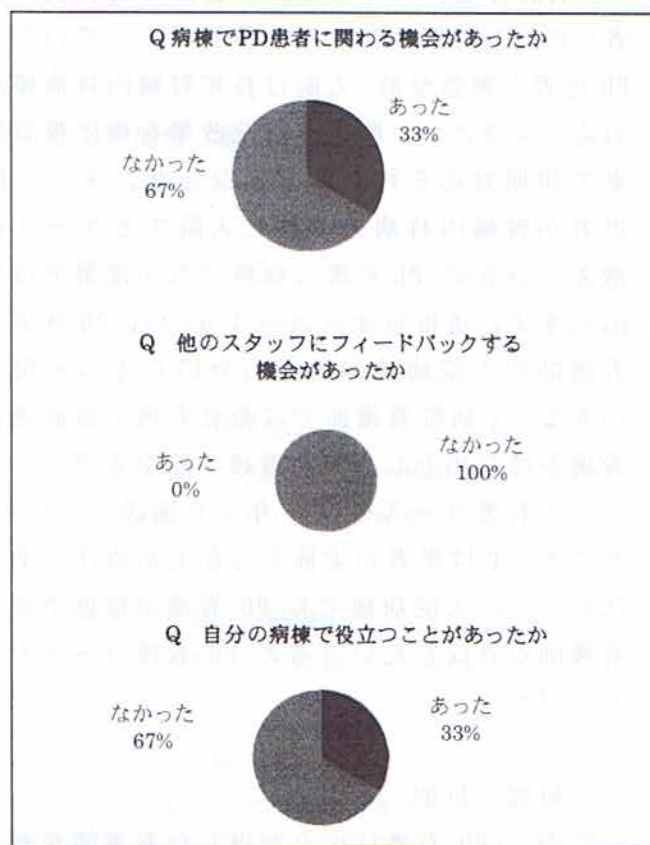


図2 受講半年後のアンケート結果

VI. 考察

PD看護コースのカリキュラムについては、枝川が「はじめにCAPD原理について説明した。このことにより、根拠をふまえての実技演習に望むことができた」と報告している¹⁾。当院のアンケート結果からも同様の反応が得られており、講義を受講したあとの演習を行うことでより手技の理解を深めることにつながったと思われる。アンケート結果でPDの基礎・実技・看護までを一通り学ぶことができたという回答があったように、PD看護の経験者にとっては、知識や技術の復習や再確認の機会となっており、PD看護の経験のないスタッフにとっては症例数の少ないPDそのものがどんな治療法なのかを学び、実際に見て理解することができたと考え、研修内容も有効だったと考える。

また、PD看護コースの受講後に、自部署で看

護を提供したり、伝達講習しようという意識が芽生えているということは、PD 看護についての消極的なイメージを払拭できたのではないかと思う。

しかし、演習の時間が短くて手技を獲得できるほど実施できなかつたり、患者への実践の機会が少なく、実施できなかった受講者もいた。菅野が「経験の機会を逃すことで実践力が身につかず PD に対する苦手意識を克服できないでいる」と述べている²⁾ように、実際に患者へ看護を提供することができるのかと不安を感じる受講者も多かったため、集合教育の演習の時間配分や実践研修の方法などは検討する必要があると考える。半年後のアンケートでは、PD 患者に接する機会がほとんどなく、受講者の多くが自部署で実践できていない現状が分かった。新病院となり腎臓内科病棟以外でも PD 患者と関わる機会が増えているため、入院病棟に PD 患者が入院した際は、勉強会をしたりデモンストレーションをするなどのフォローをくり返し行っていくことで、手技を反復することができ、入院病棟の看護師の自信につながっていくと考えられるため今後実施していく。

現在の PD 看護コースでは、PD についての基本的な知識を習得することはできるが、技術の習得が不十分であるため、受講者が PD 看護コースの目的のひとつである自部署で看護を実践し、他のスタッフへ伝達することは難しい現状がある。そこで、PD 看護の経験者に役割モデルを担ってもらうために、PD 看護の知識と技術の維持・向上を目的としたフォローアップ研修を H25 年度に開設した。今後、研修の効果を振り返り、PD 患者が在宅で実施している治療である PD をサポートできる看護師が院内に増えていくように、PD 看護コース全体の見直しを行っていく必要がある。

VII. 終わりに

PD 看護コースを受講し、腹膜透析看護の理解を深める事ができたが、自部署での看護実践に活かすため継続フォローが必要である。

引用文献

- 1) 枝川恵美：院内看護師の CAPD 教育、腎と透析 (0385-2156) 71 巻別冊、腹膜透析 2011、Page217-218、2011
- 2) 菅野仁美：スタッフの PD に対する苦手意識の原因分析、日本透析医学会雑誌 (1340-3451)、42 巻 Suppl.1、Page726、2009